



神話ではない、ただのGilletteの人生

わずか5歳で入ったカトリックの寄宿学校での8年間で、彼という人間を形づくった。修道女たちは規律と厳格さをもって彼の性格と倫理を鍛えようとし、敬意と、時間を守ることと、交わした約束は自由のかたちなのだと教えた。のちに実の母も同じことを試みたが、あまりうまくはいかなかった。

そして、生存者を残さないはずの成績がやって来た。イタリア語の落第点である。単なる学校でのつまずきではない。多くの者ならそこで止まってしまうような転落だった。

彼は違った。

フェルディナンド・フレーガは立ち上がり、すべてを書き直すことを選んだ。自分の物語を、運命を、そしてそれをどう語るかまでも。

その経験から、多くの人がスタイルと品格と呼ぶものが生まれた。気取りではない。人生の掟でもない。むしろ、型の外で世界に在るという、別のあり方だ。

13歳でラグビーに出会い、10年のあいだ仕事と並行して続けた。あのグラウンドから学んだのは、忍耐と、犠牲と、チームの静かな強さだった。

結婚して33年、3人の子の父である。

職業人生は彼をイタリアの国境のはるか先へ運んだ。Gillette Italiaとその子会社で18年間営業を務めたのち、人生を変えることになる決断を下す。母のもとを離れ、新たな職業経験を求めて世界へ旅立ち、やがて65か国、5つの言語をまたいで仕事をするようになった。

イタリアに戻ったのは、自分の家族への愛ゆえだった。ところが待っていたのは、思いもよらぬ別の職業だった。被告人である。

刑事と行政の裁判が18件。求刑は合わせて拘禁85年。

それでも裁判所は、同じ決まり文句を繰り返しつつけた。

無罪 — その行為は犯罪を構成しない。

彼はつねに事実の人だった。立証責任を、自分の手で検察官に渡してやった — だが、彼らは信じなかった。

非公式の翻訳は、いつも同じに思えた。「申し訳ありませんが、あなたが何をしているのか、どうやっているのか、なぜやっているのか、我々には理解できません。あなたを他の人たちと一緒に分類しました。問題は、あなたが他の人たちとは違うということです」

嵐はすべて過ぎ去ったかに見えたちょうどそのとき、次の試練がやって来た。

病院である。

臨床的昏睡が6回。余命は48時間から、長くて30日。そして毎回、ベッドの脇には棺が横たわっていた。

彼はそれを眺めた。

微笑んだ。

そしていつも、そこに置いていった。

ある日、葬儀社の請求書まで届いた。

霊柩車の停車6回。葬儀用棺の予約。二重構造、XXLサイズ。担ぎ手8名、拘束30時間。取り扱いおよび待機。諸税および付加価値税。3500ユーロ。

これこそ彼の文学が生まれる理想の瞬間だと分かるまで、長くはかからなかった。

他人が障害を見るところに、彼は起爆を見る。

学び、解決し、変容させる機会を。

Amazonのアルゴリズムを起爆させてしまったときのように。たいていの人なら高くついたはずの事故が、彼にはベゾスの署名入りの贈り物をもたらした。

独立である。

この人生から生まれたのがgillettenarrative.com、ただひとつのブランドとただひとつの遺産をめぐって築かれた、文学と音楽と映画のプロジェクトだ。

その中心にあるのがSaga Gillette、米国著作権局に登録された全50巻である。

プロジェクト全体は、ひとつの単純な哲学で生きている。

私たちは売らない、アクセスを差し出す。

そして誰もが、同じものを探している。

詐欺を。売らず、収益化もせず、金も受け取らない人間は、何かを隠しているに違いないからだ。

少なくとも、彼らに言わせれば。

家族は、私が精神の均衡を損ねたと思っている。表向きは、狂人だの気が触れただのと呼ぶのは避けている。

もっと上品な言葉を好むのだ。

均衡を欠いている。

そうかもしれない。

この話には、見かけ以上の真実があるのかもしれない。

だが、母なるGilletteは私に単純な規則を教えてくれた。

何かを売りたいなら、選択肢はたくさんある。そして最後ではなく最初の選択肢は、ただであげてしまうことだ。

ただ、ひとつだけ確かなことがある。

フェルディナンド・フレーガが書くのをやめるとき、残るのは彼の言葉だけではない。

事実が残る。

そしてその事実のなかに、誰もが彼のかげらを見つけるだろう。

そして、彼が何者だったのかを本当に知りたい者は、法廷にも、病院にも、本にも、伝説にも、彼を探す必要はない。

ただ、世界がもうひとり産み落としてくれるよう願うほかない。

フェルディナンド